エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２３７号

2022 年 1 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905
http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「コリント人への第１の手紙講解説教」より（７）

肉の問題

もし食物がわたしの兄弟をつまずかせるなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは永久に、断じて肉を食べることをしない。（コリントⅠ　8・13）

肉の問題は、我々の日常生活に共通する問題でありまして、例えば、酒やたばこの問題に当てはめてみることもできます。

私は信仰は大体 3 段階に分かれるように思います。第 1 段は、イエス・キリストの贖いがまだよく分からない段階です。これはイエス・キリストにならって、真似をして、清く生きていきたいと思っている段階で、善行をして、愛の行ないをして、神に救われようとする段階です。次の第 2 段になりますと、自分の善行ではなく、神の愛、キリストの贖いによって義とせられると信じる段階に入ります。しかし、ここでは、そう信じながら、やはり善行を積んで神の国へ迎えられたいと願う段階にあります。従って、これは、善行と贖いの二本

立ての時代と言えます。私の場合も、この時代が大変長く続きました。第3段階になりますと、自分は善行をしたいと思ってもそれは出来ない。我々は、イエス・キリストの贖いの力によってのみ義とせられ、神の子とされて、永遠の生命にあずかるとする段階であります、ひとえに贖いによって我々は救われることが分かる時代であります。

あなたはどの段階にいますか

クリスチャンと称している人々を見ると、大体、右の 3 種類のどれかに属しています。諸君、自分の胸に手を当てて考えて下さい。自分は今、どこの段階にいるかを。私はこれらの三つの段階を経てきました。しかし、この段階の移行は自分の力では有りません。神の恵みによってそうなって来たのであります。そうですから、自分はどの段階にあろうと、他の段階にいる人のことを批判してはいけません。この教会においては人の信仰を批判するのをやめましょう。これは、神が批判することであります。我々は、自分の妻、兄弟、親族の者、一般社会の人々にも、信仰というものを教えることは出来ません。我々は、適当な場所、適当な時、「私の信仰はこうであります」と告白すればよろしいのです。それ以上のことを言ってはいけません。…諸君は、第 1、第 2、第 3、どの段階の信仰にいてもよろしい。私は、どの段階でも天国に行けると信じています。諸君も、教会の牧師の信仰を批判してはなりません。私の現在の心境は、自分の信仰、自分の行ないによらない。また、心では如何に罪深くとも、ひとえにイエス・キリストの贖いによって、我々は清められ、義とされ、永遠の生命が与えられ、天国に迎えられると思う。口では主は救い主なり、と称える。手では、毎日与えられた自分のなすべきことをなす。自分のなしたいことではありません。なすべきことです。これが私の信仰です。…この心境に達するまでに、私は、70 年かかりました。

孔子の教え

孔子様は「十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従って矩を超えず」と仰せになりました。私は孔子先生の真似は出来ませんが、先生の爪のあかでも真似て、七十にして少しく、この信仰の味わいが分かって来ました。私は自分のしたいことをしておりません。私のなすべきことをしています。イエス・キリストは「私は常に父なる神に気に入るようにしている（Always I do what pleased him.)」と言われました。「常に、always」です。善行、愛とは、自分の仕事をほっておいて他のことをすることではありません。常にめいめい成すべきことをすることが「愛」であります。諸君、私の信仰はこのようなものであります。

パウロの誇り

わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主にある私の働きの実ではないか。わたしは、ほかの人に対しては使徒でないとしても、あなたがたには使徒である。あなたがたが主にあることは、私の使徒職のしるしなのである。（コリント前９・１－２）

パウロは、「自分は、信者であると同時に、その最高の地位である使徒である」と言っています。その理由として、「自分は、ダマスコの途上で復活された主イエス・キリストに出会った。そして、自分で大転換を経験したからである」と言っています。地上において、キリストと出会った人は多くいるが、キリストを迫害していた自分にとってその転換は大きな理由の一つであると言う。第２の理由は、「君たちが現在、コリント教会で信者として生活しているという事実である」と言いました。私が思うに、パウロの業を見ても、使徒としての十分な証拠になると思います。イエスの言葉に、「私を信ずることが出来ないのであれば、私の業を見て信ぜよ」とあります。私は、コリントの信者がパウロに対して使徒と思わないとすれば、私の業を見て信ぜよ」とあります。私は、コリントの信者がパウロに対して使徒と思わないとすれば、パウロの生活を見たらよいと思います。このことは、パウロ自身が言っておりませんが、私はそう思います。

Ｄｕｔｙ

伝道は自分の意志でやっているのではない。これは、神に強いられて、私の義務（duty）としてやっているのであると言う。この「duty」という言葉は、日本語に訳すのに最も困難な英語の一つです。今朝私は、この単語を辞書で引いてみました。第１として「behavior due to superior」とありますし、またその次に「expression of respect」とあります。即ち、「長上に払うべき行為」、「尊敬の現れ」という意味であります。また、「binding force of what is right」、即ち、「正しいことをなさねばならないという強い力」とも書いてありました。私は、日本海海戦の時、東郷平八郎が「皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と言われたことを思い出します。同じような例ですが、トラファルガーの海戦で、司令長官ネルソンが「England expects every man to do his duty」と言ったそうであります。即ち、英国は、各員がその義務を尽くさんことを望む」という意味です。「義務」と言う字は難しい字ですが、権利に対した言葉ではありません。自分がどうしてもしなければならないという気概を言います。現代の若者に、「日本は、君ら各人の義務を盡さんことを望む」と言っても、きっと理解できないでしょう。

実例は教訓に勝る

パウロは自分の実例をもって福音を説明しました。福音は、言葉で説明するものではありません。私は、中学校の時のイソップ物語を覚えています。親ガニが子ガニに、横を向いて歩くな、まっすぐ歩けと言って、自分は横を向いて歩いているという話です。その時の言葉「Example is better than precept」(実例は教訓に勝る)をはっきり覚えています。本当の教育はこれです。現代の青年に対して、我々自らが実例を示すこと、これが最大の人造りであります。子に説教する前に、まず、親が子にその手本を示すこと、家庭教育は此れに尽きます。

最後に、パウロは自分の権利を放棄することを、自分のメリットと考えていなかったことに注目したいと思います。即ち、これは神が喜び給うからであって、イエスが自分を捨てた如くにやったことであります。このようなパウロの行動がどこから生まれてきたのか。それは、自分は永遠の生命を頂いて、復活する者となったという「信仰」と「望み」から来ています。誠に短いこの世の生涯の中で、自分を燃やし尽くしたいと言いう「愛」が生まれてきたからであります。これがパウロのすべてです。これがこれから学ぶコリント前書 15 章の有名な「復活論」が登場してくる理由であります。

パウロの奴隷的態度と精進

わたしはすべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法の下にある人には、わたし自身は律法の下にはないが、律法の下にある者のようになった。律法の下にある人を得るためである。……弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。福音のために、わたしはどんな事もする。わたしも共に福音にあずかるためである。（コリントⅠ　9・19－23）

パウロは幾人かの人を救わんがために、自分はすべての人の奴隷となっていることを述べています。ユダヤ人には、ユダヤ人を救わんためにユダヤ人の如くなっている。また、律法の下にある者に対しては律法の下にあるようにしていると言っています。これは、律法の下にある人を救うためであります。パウロは、救いにはいるためには、律法から離れて道徳とは無関係に、イエス・キリストの十字架の贖いによってのみ救われるということを強調して、その基盤に堅く立っておりますのに、このようなことを言っております。これは、テモテ書で、パウロが弟子に割礼を施した例と似ております。また、使徒行伝の最後の方にも、エルサレムで、パウロがユダヤ人の習慣に対して、静観した個所が出てきます。

幾人かを救うために

パウロ程、律法を真剣に守った人もいないでしょう。パウロは、人を救うためにはその人の習慣を守りました。律法のない人、異邦人に対しても、自分はキリストに従ってはいるが、その人の救いのために律法のない人のようにふるまったと書かれています。私はちょうどイエスが、罪人や取税人などと食事を共にされたという記事を思い出します。パウロは、信仰の弱い人には、信仰の弱い人のように対処しました。これは大変に忍耐（自己犠牲）を要することであります。自分のしたいままをするのではなく、相手の好むようにするためには、誠に己に勝つの力が必要であります。パウロの努力は幾人かを救うためでのみではなく、それらの人と共に救いにあずかり、共に福音の尊さを味わいたいというパウロの願いから来ています。22 節に、「幾人かを救うために」と書かれており、「全部の人」とは言っておりません。即ち、パウロは、福音を信じる人の数に、ある限界があるように思っていたようであります。これは、伝道者にとっては非常に慰めとなる言葉でありまして、数十年にわたって聖書を説きましても、信ずる人はまことに少ない。パウロの如き世界第 1 と言われる伝道者が、すべての人を救うとは言わずに、幾人かを救うためにと言っているのであります。……パウロは福音を伝えるために、以上のような態度を取りました。これは特に、学窓を出て、未信者の中へ入る学生にとって、極めて示唆に富む箇所であります。

自分の仕事に対して命をかけて精進せよ

コリントの市街では、2年ごとに大きなスポーツ競技会が開催されました。これには、ギリシア周辺から多くの人が集まりました。スポーツの祭りのみならず、同時に宗教的な祭りでもあったようであります。出場選手は、１０か月の特訓を受けていました。今のオリンピックに相当します。特に、最後の１カ月は、特訓による厳しい節制を受けておりました。選手は皆節制と自己に打ち勝つ訓練を強いられていました。競技で勝利を受けた者にはオリーブの冠が与えられました。この地上の一時的な冠ではありますが、彼らはそれを得んがために懸命に努力しました。我々は、神から「永遠の生命」の冠を頂くために、何事にも節制するのであると言っております。〔9章〕26，27節に至って、主語が単数（私は）の文章に変わって来ています。地上の冠に引き換え、神から天上の冠を受ける我々は、自分の身体を打ち砕いて、それ以上に精進すべきであると。27節に「服従させる」と有りますが、当時、勝利者は敗北者を服従させるという習慣が有りました。聖霊に励まされ、聖霊の導くままに自分の身体を奴隷のように引っ張り廻して訓練するのだと言っております。当時のパウロは５０歳を過ぎていましたが、如何に精進・努力の生活を行なっていたかが分かります。

目の前に置かれた勤めで、副賞を得よ

宗教というものは一人称単数です。「私」はです。孔子は「７０にして心の欲するところを行なっても、矩（のり）をこえず」と言われました。ここの失格者と言う字は、試験に落第する」という意味ですが、救いから外されるという意味ではありません。救いはイエス・キリストの十字架の贖いによって復活する者となることであり、それはすでに確定しています。このように永遠の生命にあずかれる我々は、この地上の 50 年、70 年の間、人を愛するために働き、出来るだけの奉仕をせよと言っています。奉仕をすれば、その奉仕に相応した褒賞がある。これはまことに注目すべき言葉であります。「我々が復活すること」はすでに決まっていますが、その時、我々がこの世で何をしたかによって褒賞が違います。私の友人は、「それは副賞ですね」と言っていました。我々にはその副賞があります。クリスチャン・ワークとはこの奉仕のことを言います。この奉仕は、言葉を代えれば、目の前に置かれた自分の務めです。パウロにならって、己の身を砕いて精進することであります。クリスチャンの仕事はみな違います。牧師は言葉をもって伝道すること。私は、これで副賞をもらいます。副賞はみな違います。実業家あり、学者あり。どうか、自分の仕事に対して、命を賭けて頑張って下さい。

スポーツの栄冠と信者の栄冠の違い

例えば、船でアメリカに渡るとき、甲板の上にいても、船底の部屋にいても、アメリカに到着することには違いありません。しかし、どうせ同じ目的に向かうのであれば、甲板上で、景色を見ながら航海しようではありませんか。復活という同じ冠を頂くにも、周囲をよく見ながら、努力奮闘してこの褒美をもらうべきです。現代のクリスチャンにその努力奮闘が足りません。内村鑑三先生は、「天国へ行って、我らの最も悲しいことは、地上においてなぜもっとなし得たであろう善をなさなかったかということであろう」と言われました。その意味において、我々はこの世にある間、分相応にできる限りの善行を励むべきであります。人の真似をすることはありません。

スポーツにおける栄冠は、他人が負けることによって、獲得されるものです。ここには、人の悲しみが伴います。しかし、神からいただく信者の栄冠及び褒賞は、自他共に喜び、幸福になるものに違いありません。なんと光栄あることではありませんか。私は伝道者の真似ごとをしていますが、ある人が福音を信じて喜んでいるのを見る時に、私もまた、如何に嬉しいかを知っております。私は信じます。本当に善きことは自分にも善きことであり、他人にも善きものであるということを。

佐藤一斎先生の教え

佐藤一斎先生（江戸後期の儒学者、1772－1859）は、「幼にして学ばば、壮にして成すあり、壮にして学ばば、老いて衰えず。老にして学ばば、死して朽ちず」と言われました。我ら壮年、老年と言えどもなすべき訓練があります。学ぶべきことがあります。そしてそれは、我々に明確な目的が現れた時に、その訓練が可能となります。目的を持たずして訓練は出来ません。我々に力がないのは目的がはっきりしていないからであります。ふらふらしていれば力は出て来ません。人類の持てる力は、科学で未だ証明し尽くされてはおりません。どれだけの力が人間、人類に与えられているか、これはまだ計算されておりません。

競技の栄冠はいずれ朽ちるが、我々の受ける栄冠、永遠の生命は朽ちないものであります。目的が明確になってくると、我々一人一人にそれぞれ異なった務めが出て来ます。パウロは福音を宣べ伝える。私もパウロと同じ職責を持っています。各自がそれぞれ違う仕事をやる。運転手は運転を真剣にやる。仕事の質の高い、低い、それは人間の言うことです。神はそんなことを言いません。イエスは大工でした。人間の二大迷信の一つは、人間はこの世で終りであり、来世は無いと思うことであります。第２の迷信は、人は金を儲け、高い地位につければ、幸福であると思うことであります。